市民に親しまれる博物館をめざして（6）

郷土を学び、市民に親しまれる博物館づくりを目指して構想検討を進めていますが、今回は展示資料として本博物館を特色づける八朔祭屋台について、紹介します。

八朔祭屋台

八朔祭屋台は、江戸時代後期に谷村の下町、仲町、新町、早馬町の四町で作られ、神輿の巡行に供奉して、付祭りとして大名行列と共に、繰り出されました。

様式並びに構造は、四町ともほぼ同様と思われ、梁間一間、桁行二間造り、駆体は舞台前部と楽屋後部の二間から構成され、車は四つ車形式、側面の腰に格子枠が付設されています。

下町屋台の復元は、岐阜県高山市の高山祭屋台保存技術組合に依頼しましたが、復元に当たり、現存する屋台の部材を丹念に調査したところ、屋根は〝みすず張り〟ということが判りました。全部の屋台がそうであったかは不明ですが、〝みすず〟の屋根は八朔祭屋台の特色となります。

四台あった屋台のうち、早馬町屋台は地元で修復され、八朔祭には城南公園北側の保管庫から谷村第一小学校まで巡行され、祭りに彩りをそえています。

下町屋台も高山祭屋台保存技術組合の手ですでに復元が終わり、屋台展示庫の完成を待って、本市に戻ってきます。また、本年度からは新町屋台の復元に着手し、これらが一堂に揃う本博物館は、屋台展示庫と一体となり他にあまり例をみない特色となります。

屋台飾幕

八朔祭屋台の特色は、装飾として、彫刻などを多用せずに、屋台の後部楽屋の三方を囲むように掛けられる後幕、舞台と楽屋を仕切る中幕、舞台の上部に水引幕、大輪の部分に泥幕などの飾幕によって屋台美を構成していることにあります。

飾幕には、貴重であった舶来の緋ラシャ地に金糸、銀糸の刺繍がふんだんに使用され、往時の谷村の経済力と共に、祭によせる心意気が感じられます。

祖先から引き継いできたこれら飾幕も傷みが進んだために、昭和四十八年から、日本を代表する染色研究者である山辺知行氏（多摩美術大学名誉教授）の指導のもと順次修復が進められ、山辺先生には米寿を越える高齢にもかかわらず、本年よりは修復作業のピッチをあげていただいております。各屋台の飾幕は以下のとおりです。

早馬町屋台

後　幕「牧童牛の背に笛を吹く」
（伝　葛飾北斎　落款無）

中　幕「裸馬群像」
（柳文朝　南柳斎の落款）

水引幕「雲龍」

泥　幕「百足」

後幕と水引幕の修復が完了し、本年度傷みがひどかった泥幕の修復に着手しています。

下町屋台

後　幕「虎」
（東陽画狂人北斎筆の落款）

中　幕「三番叟」

水引幕「注連縄」

泥　幕「龍」

後幕の修復が完了。

新町屋台

後　幕「鹿島踊」
（伝　葛飾北斎　落款無）

水引幕「龍」

後幕と水引幕の修復が完了。

仲町屋台

後　幕「桜に駒」
（鳥文斎藤原栄之の落款）

泥　幕「鯉」

後幕と泥幕の修復が完了。

これらの屋台飾幕は、それ自体が美術工芸品としても優れたもので、葛飾北斎、柳文朝、また、歌麿と浮世絵美人画界の人気を二分したという藤原栄之、これら江戸時代を代表する有名な絵師の筆によるものなど、本市が誇る貴重な文化遺産です。

仮称都留市郷土資料館の収蔵展示資料の調査を実施していますので、ご所蔵の資料を寄贈、または、寄託いたたげる方は、ご連絡をお願いします。

社会教育課文化振興係

高校総体開催に向けて

今年の八月からいよいよ高校総体が山梨県で行われます。都留市でも全国からこれまでになく大勢の高校生を迎え『相撲』競技が行われることになっています。そこで今月の広報から、この『相撲』についてその歴史などを探って行こうと思います。

『相撲の歴史』

相撲の起源は非常に古いものです。『古事記』では、力くらべが古代国家建設の際に行われた神事的占いを象徴するものであり、『日本書紀』においては古代日本列島の先住民であった出雲族と、新勢力である大和民族とが和合するにあたって行われた神事を象徴するものとしてちからくらべの記述が存在することからもそれはいえます。

奈良時代末期から平安時代にかけて、相撲は〝三度節〟という儀式のひとつとして「七月（のちに八月）の相撲節会」と呼ばれ、正月の射礼、五月の騎射と並んで当時の宮廷で定期的に開かれるようになりました。

政権が武士の手に移った鎌倉時代、相撲は節会相撲の要素を残した娯楽競技として行われる一方、武士階級の間では心身鍛練のための武術として行われるようになり、当時の、甲冑をつけた戦闘に必要な体力と精神力をつくる目的で用いられたこの相撲は「武家相撲」と呼ばれています。

鎌倉時代以降、戦乱が治まることで失業した浪人達は、同様に失業した大名のお抱え力士などを中心として独立し、大阪、京都各地で相撲興業を開くようになりました。当初は、神社仏閣の建立や道路の整備などの資金調達を目的とした寄付相撲だったものが、次第にその性格を変えて営利目的で行われるまでになりました。勧進元から給料を与えられ、職業として相撲を行ったことから、これが現在のプロ相撲のはじまりであったとされています。

明治から大正、昭和にかけて、相撲は社会のさまざまな人びとに愛好されるスポーツとして行われるようになりました。

明治時代には政府が職業としての認可を与え、大正時代には、それまで関西と関東に分かれて興行していたものを合併する形で、大日本相撲協会が財団法人として発足し（大正十四年）、戦後はその名称を財団法人・日本相撲協会と改めて今日に至っています。

一方、アマチュア相撲も、昭和二十一年に日本相撲連盟が設立され、各種競技会の運営や指導などを行っています。

高校総体においても相撲は、大正八年から、毎年高校生の熱い戦いが繰り広げられています。